



No. 283	2009. 6.15. 発行
あごら札幌 連絡先 011-644-2927 細田 細田英理子	今月通信担当

### 《今月の内容》

- |                    |      |
|--------------------|------|
| * WAN設立呼びかけ        | 1~2頁 |
| * 小田まゆみさんツアー       | 3頁   |
| * 放射性廃液に立ち向かう岩手の市民 | 4~5頁 |
| * 本と暮らす(47)        | 6~7頁 |
| * 情報               | 8頁   |

通信購読料(年間)1200円 郵便振替 02710-3-570あごら札幌

## NPO法人 ウィメンズアクションネットワーク設立

### ウェブがつなぐ女たち

5月22日、上野千鶴子さんの呼びかけで、道内の女性グループが集まりを持った。エルプラザには旭川、登別の女性活動家、札幌からは男女共同参画センターの女性職員をはじめ各女性団体の活動家10数名が集まった。あごら札幌からも3名出席した。上野さんから立ち上げの経緯やNPO法人の内容説明、道内での参加要請について詳細な説明があった。以下、会の趣旨を掲載。

女性をつなぐ総合ウェブ・サイト「ウィメンズアクションネットワーク(WAN) <https://wan.or.jp> (6月1日サイトオープン)

WANは女性に役立つ情報を提供し、女性問題とそれに関連する様々な活動がつながり、連帯を深め、発信力を高める、ゆるやかで力強いネットワークをめざしています。とくに、(1)行政・民間双方にまたがる全国の様々な活動や団体・グループの動きを互いに結び付け、女性の活動をさらに有効なものとしていくこと、(2)従来、女性問題、ジェンダー問題に否定的あるいは無関心であった様々な層にも働きかけ、女性運動が蓄積してきた貴重な情報を届ける可能性を開くこと、を大きな目標としています。このサイトには、女性関連ニュース、全国の女性情報、女性の視点による本、映画やアートの紹介、ジェンダー学講座やゼミの紹介、困った時の情報マップなど、女性に関するお役立ち情報が満載です。

# ジェンダーフリー・バッシングと如何に向き合うか

上野さんの会設立の背景には、ジェンダーフリー・バッシングがあるとの事。

バッシングに対処していく為にもこの会の広がりを強めたいと語っていた。

2005年、上野さんの国分寺市での講演差し止めは知っていたが、改めてバッシングの状況を調べてみると表面化しているものでも、枚挙に暇がなく、愕然とする。

1999年 石原慎太郎東京都知事に当選 (ここからバッシングが加速する)

2001年 千代田区男女平等参画センター 松井やよりさん講演中止

台東区男女平等推進プラザ 辛淑玉さん講演中止

石原知事「パパ活」発言

2003年 七生養護学校事件 都教委「不適切な性教育」批判で教員の大量処分 都教委式典国旗国歌実施通達

2004年 都教委「ジェンダーフリー不使用」通達

2006年 千葉県男女共同参画センター設置条例否決

市川市男女平等条例廃止

福井県ジェンダー関連図書 153冊撤去事件

2007年 愛媛県 女性学・ジェンダー研究を奨励しない決議

2008年 つくばみらい市 DV防止法関連講演中止

最近では大阪の橋本知事がドーンセンターつぶしにやっきになっている。阿部内閣時代は山谷えりこと組んで男女共同参画社会基本法改廃を目的に掲げ「家族の紳を守る会」が発足

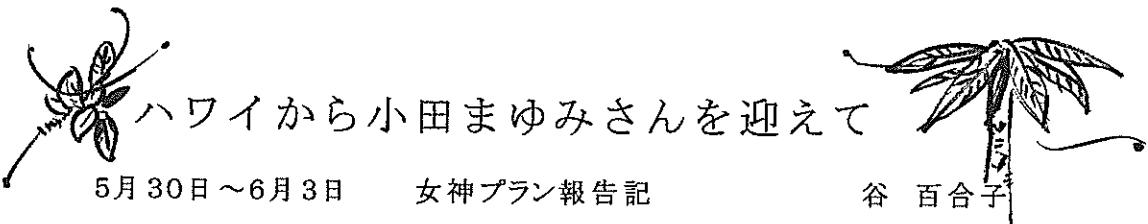
札幌で、従軍慰安婦について若い人たちと話す会があつて知り合いが参加した。

男子の多くは、昔のことだからと、加害者の性であることに戸惑いが見られたとの事。一方女子はかつて同性がこんなにも酷い思いをしていた事に驚き、もっと知らないくてはと前向きであったとの事。男性の性が戦争をするために、時の政府に利用されたのであり男達はある面、被害者でもある。ジェンダーバッシングが知らないうちにじわりと進んでいる事を、若い人達とも、もっと話していけたらいいと思う。

この会が女から女へつながることで若者たちにも希望が見える事を期待したい。

**サイトを立ち上げ維持するにはお金がかかります。**

会員募集 NPO法人の一般会員(年会費1万円、学生・非正規職は五千円  
寄付も1万円から募っている。振込先・ゆうちょ銀行・普通口座 記号 14480  
番号 20921571 「ウイメンズアクションネットワーク」 (谷百合子報告)



北広島在住のYさんから「ハワイの小田まゆみさんを呼んで個展と講演をしようと思う。ご一緒しませんか?」と声をかけられた。「え~つ!あの小田さんが!」と思わず叫んでしまった。1992年、世界中から核を無くそうと「虹の蛇」と言う素敵な会が立ち上がり、小田さんはその中心メンバーであった。世界中の反核の女たちが声を上げ、私も六ヶ所に関わっている女たちと参加した。人様がどう言おうと女たちでやる事は楽しい。小田さんデザインの素敵なTシャツを着て日本の女達も楽しんだ

桐朋学園の同窓生2人と私の3人で始まったのが、いつのまにか30人のスタッフになり、老い(?)も若きも大勢の人がまゆみさんを囲んで、世界平和のための女神プラン企画を開催。東京、函館、札幌、長沼町に大勢人びとが集った。札幌の紀ノ国屋会場も彼女の絵を見る人で連日満員であった。小田さんの版画はニューヨーク近代美術館、ボストン美術館、栃木県立美術館、東京芸術大学など多くの美術館にコレクションされている。女神をテーマにした版画はどれも深い「慈愛」に満ちており、1枚1枚の絵が「生きる希望」を謳っていた。立ち去りがたい思いにかられながら、女に生まれてよかったですしみじみ感じ、なんともいい気持ちになっていた。

当初は「女神」がテーマと聞いていたので、自称も他称も魔女の私としては、多少気になるものがあった。岩崎ひろみの歌に「マドンナたちのララバイ」と言うのがある。「男はみな傷ついた戦士(さあ男達よ)私のもとでお眠りなさい」というフレーズがある。女神なら全ての男を許せるのかも知れないが、受難の道を歩いている魔女には許せないものが沢山ある。ジェンダーバッシングを巧妙に進めていた戦争勢力や、原子弹の平和利用の名のもとに核兵器産業と結びついている死の商人。名誉殺人の名のもと妹や姉を殺すイラクの男達。原発も戦争も、生きるための生活の場でさえ女に預けっぱなしの日本の男達。女をいつまでも母親代わりにされてはたまらない。

等と私は考えていたのであるが…

小田さんはカリフォルニアと東京に団体「プルトニウムのない未来」を設立し、反核の運動や新エネルギー推進運動を続けてきたが、今はハワイ島の広大な有機農場「ジンジャーヒル・ファーム」で畑を耕し、大地に根ざした生活をしている。そこで世界に羽ばたく女性のリーダーを養成している。そのスケールは広大で深い。

悩みを経て、禪の修行、ヨガの鍛錬の上に、今日の小田さんの寛容があるので思う。人にはそれぞれ分というものがある。小田さんは慈愛で世界を救う「女神」であり、私は限りなく女神にあこがれる魔女でいよう。魔女は怒り、我がままにミステリアスなのだ。

# 放射性廃液の海洋投棄に立ち向かう 岩手の市民たち

川村史子

はじめまして。尊敬する谷百合子さんの紹介で、初めて投稿します。仕事は地元新聞社の記者をしています。

5月9日から12日にかけて、取材で青森県大間町の（株）電源開発の原発建設地と、青森県六ヶ所村の（株）日本原燃の核燃料再処理工場、そして盛岡市の市民団体と三陸海岸・宮古市の重茂漁協を訪ねました。

核燃料再処理工場が放射性物質を海洋や大気に放出しており、それに抗議する岩手県の住民や漁協の話を聞くためです。（詳細については、5月19、20日付の北海道新聞朝刊をご参照ください）

## ■原子炉と民家

大間には函館からフェリーで行った。大間原発に反対する函館の市民団体に同行した。

まずは、原子炉建屋から250メートルの至近距離にある故・熊谷あさ子さん所有のログハウス、通称「あさこはうす」へ。熊谷さんは電源開発の用地買収要求を拒み続け、3年前に急死した反対地主の一人だ。「はうす」は、今、函館に住む長女の小笠原厚子さんが管理している。母の遺志を継ぎ、月に半分くらいは「はうす」で過ごす。

「はうす」は原発建設地のど真ん中にある。「はうす」につながる未舗装の道路の両側には高いフェンスがそびえる。原発の敷地に入れないようにするためだ。公道から「はうす」への道の入り口に歩哨小屋があって「はうす」に出入りする人々を監視している。

「はうす」を無視した建設工事も異常だが、原発の建設敷地のすぐそばに多くの民家が建っていることにも驚いた。地元で建設反対運動を続けてきた農業者の佐藤亮一さんによると、炉心から2キロ圏内に保育園や小・中学校がある。

実は、原発の建設に関する「原子炉等規制法」では、民家から原子炉を何キロ以上離さなければならないという距離規制はないのだ。

## ■青森最大級の企業

次の日、野辺地からレンタカーで六ヶ所村の日本原燃の再処理工場へ。どしゃぶりの雨だった。

再処理工場での目的は海洋や大気への放射性物質の放出の実態を確認することだった。特にどれほどの濃度の放射性廃液をどのように海洋放出しているのかを知るために。

工場の正門を通るのは二度目。前回は試運転（アクティブ試験）が始まる前の2004年夏だった。当時から比べると、中に建物も出入りの業者も増えた。

ご存じの通り、日本原燃は原発を持つ電力会社が出資して設立した民間会社だ。使用済み核燃料の再処理のほか、ウランを濃縮して原発で使う核燃料の製造（今は実験中）、低レベル廃棄物の貯蔵、再処理後の高レベル廃棄物の保管などを行う。社員は約2400人。関連業者も含めると約4000人で、おそらく青森県では最大の民間企業だろう。

社員の給料も含めてこの会社の事業費は、日々の電気料金でまかなわれている。北電の場合、再処理費用として1キロワット時あたり10銭を徴収している。

再処理はリサイクルのように聞こえるが、全く別のものだ。放射能がもれないように核燃料を封じ込めてある金属の細長い筒をネギのように細かく剪断して、硝酸液などで溶かし、プルトニウムとウランを分離する。放射性物質を取り出すのだから、原発の何百倍の放射性物質が出てくる。

## ■原子力の隠蔽体质

取材対応の、技術系の役員のN氏は、愛想のよい紳士風。「放射性物質はたしかに海や大気に出しているけれど、拡散されて薄まっている。再処理工場周辺に住む人が毎日漁をして、地元の野菜や魚介類を食べても、被爆量は0・022ミリシーベルトを超えないように調整して放射性物質を出している。これは日本の法律が定めている年間許容量の5分の1以下だ」と強調した。

ところで原燃の言うこの被爆量、実は矛盾に満ちている。だいいち工場が本格稼働していないうちから、なぜ0・022ミリシーベルトを超えないなんて言い切れるのだろうか。

相手側の説明を聞いていると、取材時間が足りなくなる。ここは嫌われるのを覚悟で、強引に行くしかない。

「ところで、放出口からはどれくらい量（ベクレル数）の放射性物質が海に出ているんですか」。「海底の放出口からすごい勢いで海に出しているから、放射性物質は海中で拡散する。廃液の濃度など意味がない」。訪問前にも質問を送っているにもかかわらず、なかなか答えようとしない。自分たちの都合のよい情報は膨大な広告宣伝費（原資は電気料金）をかけても公開するが、少しでも都合の悪いと思う情報は「データがない」「計算できない」と公開しない、つまり「隠す」のは原子力業界の常套手段である。

#### ■敵に塩を送る？

それでもしつこく食い下がって、ようやく「1リットル当たりのトリチウム（三重水素）が1億ベクレル、同じく放射性ヨウ素100ベクレル」の廃液を「週二、三回、しかも一回600立方メートル流している」との回答を得た。

さらに「その排水の被爆量はどのくらいか」「放出口そばの海水を10リットル飲んだときの被爆量が十数ミリシーベルトになる」。ちなみに日本人の年間被爆量の基準は年間1ミリシーベルトだから、かなりの高さ。ところがN氏は「海水1リットルなんて飲めませんよね。放射性物質より海水の塩分の方が体に悪い」と話を切り替えた。

そもそも放射性物質は拡散するが、消滅するわけではない。ただ日本の近海および世界の海へとばらまかれるだけだ。

取材終了後、N氏は唐突に1キログラム入りのアジシオの袋を取り出し、「塩をいりませんか」と言い出した。どこぞの自然遺産の塩ならいざしらず工場生産の塩なんてと正直むつとした。今思うと取材の記念に、N氏のサイン入りのアジシオをもらっておけばよかった。

ところで、「放射能より海水の塩分の方が健康に害がある」との詭弁は先輩記者も聞かされたそうだ。

#### ■岩手から全国署名

最後に再処理工場の放射性物質の放出に抗議している岩手県の市民団体と三陸海岸宮古市の重茂漁協を訪ねた。岩手県で問題となっているのは、下北沖を流れる津軽暖流が南に向かって流れているからだ。その放射能の影響を最も深刻に受けとめたのが、長年海の水質の保全に取り組んできた三陸の漁協だ。（漁協の話は新聞の記事で紹介しているので、ここでは省略する）。

盛岡市で「三陸の海を放射能から守る岩手の会」の例会に参加した。会の世話人の永田文夫さんと盛岡駅で会って、例会の会場のお寺に連れて行ってもらった。とても立派なお寺だった。会員は十人ほどで、永田さんをはじめ定年退職した中学や高校の理科系の先生が多い。会員たちは日本原燃のホームページを丹念にチェックし、図書館で青森県の地元紙の再処理工場関連の記事をコピーしたりと、実にこまめに再処理工場に関しての情報を集めていた。

会では岩手県選出の国會議員や地元の県議、市町村の議員に再処理工場の放射性物質の海洋放出について説明して、国会や地方議会でこの問題を取り上げてもらえるよう地道に動いている。

保守・革新のへだてなく、政治もまきこんで放射能から岩手の空と海を守ろうという活動は理性的で実践的だ。

永田さんたちは近く再処理工場からの放射性物質の放出反対を訴える全国署名を始める。北海道も岩手ほどではないが、再処理工場の放射能の影響を確実に受ける。ぜひ岩手の動きを盛り立てたい。

永田さんの連絡先は、電話019・661・1002（ファックスも）。  
「三陸の海を放射能から守る岩手の会」のホームページもある。

# 本と暮らす

(47) 『子どもを生きればおとなになれる～インナーアダルトの育て方』

クラウディア・ブラック 著  
水澤 都加佐 監訳・武田 裕子 訳  
アスク・ヒューマンケア 刊

この本の原題はChanging Course ~Healing from Loss, Abandonment ,and Fearです。日本語に直訳すると「(人生の)コースを変える～喪失・見捨てられ・恐怖(の体験)を癒す」といった感じかな。この日本語版の題名は、あんまりいただけないなあ。こんなに良い本なのに、かえって日本語の題名で損している感じがします。

だって、題名だけではAC関係の本だって分かんないし(つまりACの回復を助けてくれる本を探している初心者がみつけづらい)、インナーチャイルドのことを知っているACだと副題の「インナーアダルト」っていう言葉でひっかかってしまうし(私がそうだった)。ACという言葉を提唱したクラウディア・ブラックというひとのことや、これを出版しているアスクのことを知っていないとアクセスしづらいのだ。前々回、西尾和美さんのワークブックを紹介したけれど、「間違なく私ってACだ」って自分のことを自覚しているひとだったら、こっちを先に読んだ方がいいかもしない。

特に素晴らしいと思ったのは、第1章「過去の痛みの正体を知る～子ども時代の痛みを、「喪失」「見捨てられ体験」として見直す～」と第2章「現在の痛みのサイクルを知る～なぜか繰り返してしまう苦しい生き方。そこから抜けるには?～」です。こんなに明確にACが受けてきた古傷のなみ・性質とそれが現在の「生きづらさ」にどうつながっているか、を一般向けに記述してくれた本はなかったように思います。

第1章を読むと、一見同じような体験をしていても(例えば貧乏・片親家庭で育つなど)、芯が健康なひともいれば、そうでなくACとして課題を抱えるひともいるわけも理解できます。

「人生に喪失はつきものです。この世に生まれたときから、父や母のもとから離れていく旅が始まるのですから。人が喪失を体験するのは自然なことであり、必然的で避けがたいものです。それと引き換えに、私たちは強さや健全さを育していくことができるのです。(略)子どもが自然な喪失を体験し、親からのサポートをもらえたときは、悲しいけれど同時に、愛されて、安全であることを感じます。サポートが得られないとき、子どもは悲しみを感じると同時に、愛されていないと感じ、見捨てられていると感じるのです」

最近(特にここ5年くらいかな)、精神科医療では「心理教育」がブームです。ま、こういつちやなんだけれど、アルコールなどの依存症医療の分野では、日本でさえ、もう20年以上前から常識だったことを、統合失調症や気分障害を中心として治療・援助しているひとたちが改めて気づいて(それもたいがいは欧米での実践で効果が上がったものを紹介するという形で)「心理教育が大切だ!」って言い始めたって感じですがね。病名や病気の性質や「何が症状なのか」ということや「どうしたら、病気が良くなるのか」っていうことを治療を進める主体である患者さんやサポーターの家族がきちんと知らないで治療が進むわけないじゃん。今頃になって「心理教育」「心理教育」って騒いでいるあんたたち、いったい今までどうやって「治療」していたわけ?!

・・・とちょっとエラソーに言ってしまったけれど、本当に学ぶということは大切なのだ。「知識は力なり」というのは本当なのだ。地獄の釜の蓋を開けてしまったように混沌として怒りや悲しみや恐怖に充ち満ちた自分の体験をACが整理していくには、自分の体験を聴いてくれる存在(仲間・カウンセラー)と、体験を整理する概念枠が絶対に必要です。

クラウディアは書きます。「私たちACは、心の中に慢性的な喪失を抱えています。けれど、自分が何を失ったのか、はつきり気づいていません。そこにあるのは漠然としたむなしさ、何かが足りないという感じ、今の自分ではダメなのではないかという不安です。この漠然とした喪失感を何か別のものや人で埋めようしたり、必死で大丈夫なふりをしてみても、むなしさは消えません。私たちに必要なのは、自分が何を失ったのか、その正体を明るい日の光のもとで確認してみることです。そしてそれをきちんと言葉にすることです」(第1章より)「子ども時代の痛みとともに生きてきた私たちは、痛みに対するさまざまな防衛法を身につけています。たとえば次のような方法です。(略～この部分を読みたくなった読者はこの本を買って読むべし)こうした方法はもともと自分を守るためにものだったのに、今や私たちにさらなる痛みをもたらしています。つまり私たちが今感じている痛みは、未解決の過去の痛みと、過去に

支配された現在の痛みとが合わさったもので  
す」（第2章より）

「うなんだよ！この本の第1章と第2章は、私たちACが自分の過去の体験・現在の生きづらさを整理する概念枠を与えてくれる、とてもすぐれた心理教育の章と言えるでしょう。ここを読むためだけでも、この本を買う価値があるよ、と言いたいくらいによくまとまっています。

第3章「自由への4つのステップ」はそんなに目新しいものではないけれど、ACの回復ステップを4つというシンプルなものにまとめているのはいいね。「過去の喪失を探る→過去と現在をつなげる→取りこんだ信念に挑む→新しいスキルを学ぶ」、ひとつひとつのステップにどれくらい時間がかかる長旅だけれど、旅の見取り図がシンプルなのはいいよね。AAを起源とする回復の12ステップに出てくる、日本人にはなじみがない「神」「ハイアーパワー」という言葉を使わずに記述してあるので、自助グループから回復コースを歩き始めたひとでないひとにも、理解しやすいという長所もあるかな。

私がいちばんひつかかっていたのは第4章「インナーアダルトを育てる」です。インナーアダルト？！何じゃそりや？！なんでそんなものが必要なわけ？？？読んでみたら、なんちゅうことではない「新しいスキルを学ぶ」ということだった。それなら、そうと書けよ。・・・なんですが、今のつれあい曰く『ひとつぐらい新しい言葉を使わないと、「何だあ、今までのものを上手にまとめただけでしょ」と言われるじゃん。「ねえねえ、この言葉、私が考えたの。聞いて聴いて」って、ことじやないの？ノベルティが必要だったんじゃないの？』 むむう、そうかもしらんねえ。まあ、そういうことを言うと、インナーチャイルドということばも、ジョン・プラッドショーが『インナーチャイルドへ本当のあなたを取り戻す方法』（NHK出版刊）で初めて使って、ACの誰もが実感できる概念だったから爆発的に広まったことばですから、インナーアダルトなる言葉もこれから時の篩いにかけられてどうなっていくか、を見守ることにしましょう。・・・私はね、あんまり後世までは残らないことばじゃないか、って思っているけど。傷ついたインナーチャイルドってのは、本当に実感できただけれど、現在進行形で回復作業をすすめていて、古い役立たずの”スキル”を手放して新しいスキルを身につけていく過程にあります私にとってはインナーアダルトっていう言葉はあんまりピンとこない言葉だから。

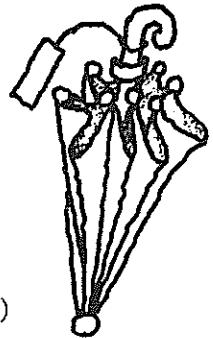
第5章「秘密はいらない、役割はいらない」も、これまでACがひつかかりやすかった罠から、ACを救い出してくれる章です。とくに「かつて演じていた私でないなら、私は誰？」とい

うところで、それを明確に書いてくれています。「役割に縛られなくなるということは、その役割が持っている強みにまで別れを告げることではありません。いいところはそのままにして、もっとバランスある生き方を学んでいけばいいのです。次にあげるのは、あなたが何をそのまま維持し、どこをこれから育てていけばよいかについてのヒントです」ここを読んでみると、なんだかね「\*\*さん（=この半年以上、不調になっては自己判断で不規則な休みをとることを繰り返し、それでも「休んだから、もう大丈夫。自分はちゃんと仕事できるんだ！」と否認を続けている管理職スタッフ）、あなたはきちんと回復作業をして、このポイントに気づけば、現在みたいな泥沼状態から脱出できるのにね。ま、当分の間、それは難しいみたいだねえ」という溜息まじりの想いを禁じ得ない私なのですね。

第6章「新しい関係をつくる～家族との関係をどうする？ 新しい親密な関係を育していくには？」も元祖ACのクラウディアならではの記述です。特に「家族との関係で回復を妨げられないために」で書いてあることなどは、とても実践的であり、かつ、これまでのAC本ではあまり具体的にとりあげられていなかった部分でもあります。「回復を始めていない人との関係を保ちつつ自分を大切にするには、限界と境界をつくり直すことが欠かせません。家族がいまだに、否認、思い違い、凍った感情、アディクション、強迫行動の真っ只中にいる場合、どのぐらいの時間を一緒に過ごすと、自分の領域が侵されたと感じるでしょう。別の言い方をするなら、あなたが境界を保てなくなるまで、どれぐらい時間の猶予があるでしょう？ 20分、あるいは二時間、長くとも三日というところでしょうか。過去のパターンをよくよく振り返って計画を立てることです。15分話していると雰囲気がまずくなるようなら、訪問は10分で切り上げればいいのです。電話でも同じことです。最初の数分は大丈夫でも、それを過ぎるとかつてのパターンが幅をきかせ始めるものなのです」そうそう、うなんだよ！この20分という単位なんかは、ACでなければ書けないよ、って思うね。本当にそうだらね。私自身、1階に暮らしている（玄関から何からすべてセパレートした形式にしておいて本当に良かったよ・・・）親たちのうちを訪問して、自分の境界を保つて平静に話していられるのは、現時点ではいいところ15分です。それも両親そろって（父親とだけ単独で面会することは未だに恐怖できない）、日中、応接間で、という条件つきです。

ということで、この本は本当におすすめ！！2000円で日本語でこの内容が読めるのはありがたいことです。（まみ）

# INFORMATION



## ☆藤原智子監督 映画祭（男女共同参画週間特別企画）

日時 6月24日(水) 25日(木)

会場 エルプラザ男女共同参画センター3階ホール（札幌市北区北8西3）

上映は①杉の子たちの50年～学童疎開から明日へのメッセージ～

②ルイズその旅立ち ③伝説の舞姫 崔承喜 ～金梅子が追う民族の心～

\*監督講演もあります

1回券前売り 1000円（当日 1200円）2回券(1600円)、3回券(2400円)もあります。

\*詳細は札幌映画サークル（011-747-7314）か男女共同参画センター（728-1255）へ

## ☆昭和史を語る「伊藤ルイズの市民自治」

—藤原監督の作品を手がかりに時代の思想と社会、生活を考えます

日時 6月20日(土)18:30～20:00 エルプラザ（北8西3）

講師 森 啓さん(NPO自治体政策研究所理事長) 参加費 500円

\*詳細は上記男女共同参画センターか映画サークルまで

## ☆「やめない！負けない！あきらめない！」女性労働者の集い

日時 7月11日 13:30～ 参加費 500円

会場 北海道教育会館4階大樹（中央区南4西12）

講師 家田愛子（札幌学院大・教員）

主催 北海道ウイメンズユニオン

## ☆六ヶ所村ラプソディの菊川慶子さんをお招きして

日時 7月14日（火）18:30～ 参加費 1000円

会場 札幌エルプラザ4F大研修室（北区北8西3）

講師 菊川慶子（花とハーブの里代表）

主催 自由学校「遊」（011-252-6751）

## あとがき

介護問題もあり、バタバタした春でしたが、忙しい時期も終わり、ほっとしています。

ついに WAN のサイトがオープン（詳細は1 頁目）。上野さんによると運営、維持に何百万（何千万？）ものお金がかかるとか。百万回以上のアクセスがあると広告がとれて採算があうようになるので、この何年間かでそうしたいとのこと。是非アクセスしてみてね！ためになる情報がいっぱい。私はブックコーナーが面白かった。ウイメンズアクションネットワーク WAN で検索できます。（E子）